



## 編集後記

平成が終わりと令和となり、そして10連休が終わった。なんと10連休である。連続して1ヶ月の3分の1が休みとなった。土日が休みの方なら、合計すれば軽く1ヶ月の半分が休みになる勘定である。基本的に月給という定額の給与生活者であるサラリーマンや公務員は良いだろうが、日銭で成り立っている個人店や時給・日給で生活している向きには過酷な連休となったはずである。事実、都内を走るタクシーなども大きな打撃を受けたと聞く。

言うまでもなく社会は大きな連鎖で成立している。サラリーマンや公務員など月給を前提とする給与生活者が勤務先に出かけないとすると、そこに付随する様々な業種の人々が打撃を被る事になるのだ。10連休を決めた政府や内閣はそうした点にきちんと配慮した上でこの連休を設定したのだろうか。豊洲市場を筆頭に都内の市場では連休以外の時期は日曜日、水曜日と祝日を休業日としている。10連休中、4月30日は休業日としてすでに発表済みであり、5月1日は水曜日でもともと休

業。残りの4月29日、5月2日、5月3日、5月6日は臨時営業したという(足立市場のみ6日休み)。そうしなければ、鮮魚店の店頭から売り物である魚が消えてしまいかねないからである。さらに働ければ漁業に携わる人々も、船を出し、漁をしなければ生計が成り立たなくなる可能性がある。月給制ではない非正規雇用者と呼ばれる人々にとっては5月の初旬に10日も休むわけにはいかないというのが実情だろう。

とかく日本人は働きすぎだと言われるが、実は1年間の祝祭日数は17日もあり、世界の中でも群を抜いて多いのである。続くのは香港の13日、シンガポールの11日、オーストリア・米国・韓国の10日、フランス・スペインの9日以下は1桁となる。ところが有給休暇の付与日数となると、フランス・スペイン・ブラジルが30日、イタリアが28日、オーストリア25日となり日本は20日で世界7位である。ちなみにその有給休暇の消化数を見ると、フランス・スペイン・ブラジルが全数消化で30日、オーストリアも全数消化で25日、イタリア21日と続き、日本は半数消化の10日で11位に沈む。休日をいかに過

ごすか。バカンスを楽しむのも良いだろう。家族や友人と過ごすのもまた然りである。大切なのは祝祭日や有給休暇付与数ではなく、休みたい時に確実に休める社会なのではないだろうか。

「働き方改革」と言えば聞こえは良いし、改元を契機に10連休を担ぎ出すのもインパクトはあるが、本当に豊かな社会のひとつのパロメーターは、確実に休暇の取れる社会なのではないだろうか。もちろん、このことは個人事業主や個人商店主、さらには非正規雇用と呼ばれる人々にも当て嵌められなければならない。

そう考えると、果たしてこの10連休、真の意味で豊かに過ごすことの出来た日本国民はどれほど居たのであろう。

◆ 筆者は、どうか。

本号の締切が連休明けであったこともあり、結局自宅で原稿書きに明け暮れる毎日であった。

それでも、オフィスに出かけず、終電車も気にすることなく、ゆっくりと落ち着いてキーボードに向かうことの出来た日々であった。読者諸兄諸姉の連休はいかがであったらう。

(溪)

# 月刊 公論

6月号 第52巻6号

令和元年6月1日発行 毎月20日発売  
本体価格848円(税別) 送料86円

発行人 大 中 吉 一 編集人 林 溪 清  
発行所 株式会社財界通信社

〒160-0008 東京都新宿区四谷三栄町10-12 ポナフラワービル  
TEL.03-5379-5611(代) FAX.03-5379-5616

印刷所 株式会社廣済堂  
取次店 日本出版販売/大阪屋栗田

- 直接ご購入をご希望の方は、本社までお問い合わせ下さい。
- 万一、乱丁、落丁などの不良品がございましたら、お取り替えいたします。